

特集にあたって (特集 途上国・新興国のスポーツ)

著者	安倍 誠
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	237
ページ	2-3
発行年	2015-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003177

特集にあたって

安倍 誠

●はじめに

スポーツは、観るにせよ、あるいは自ら行うにせよ、娯楽として人々の生活にはなくてはならないものである。どのようなスポーツを楽しんでいるのか、またその楽しみ方は国や地域によって大きくことなる。国によってはプロスポーツの興隆や人気スポーツのマーケティング効果など、ビジネスの世界でもスポーツは無視し得ない存在になっている。さらに、スポーツの国際大会は、人々に与える高揚感ゆえにしばしばナショナルリズムと強く結びつき、一国の政権は自らの維持のためにスポーツを利用し、政府はスポーツ振興の名の下にトップアスリートの育成に大きな力を注いできた。それゆえ、ある国・地域のスポーツは経済や政治のあり方に少なからず規定されている。他方で、近年はサッカーや野球などプロスポーツ

のグローバル化が急速に進行し、それが各国のスポーツのあり方にも影響を与えるようになってきている。

●対北競争の手段としての韓国スポーツ

スポーツと政治、そしてナショナルリズムの関係について、ここではお隣の韓国を例にみてみよう。韓国のスポーツといえば、サッカーなどで日本に対して対抗心をむき出しにする様子を想起する人は多いだろう。サッカーにおける日韓の因縁は深く、最初の激突となった一九五四年三月のスイスワールドカップ極東予選での日韓戦二試合（日本）への出発前に、当時の李承晩大統領が「負けたら玄海灘に身を投げろ」といった話は有名である（結果は韓国の一勝一分けで本戦進出）。

振り返ってみると、韓国がまず強い競争心を燃やした相手は北朝鮮であった。一九五三年に朝鮮戦争が停戦になった後、南北はいわば国力をめぐる競争を繰り広げることになったが、スポーツもそのひとつであった。北朝鮮はIOC（国際オリンピック委員会）など国際スポーツ界への参加には大きく出遅れたものの、社会主義国家ならではの「ステートアマチュア制度」により国家丸抱えでの選手育成に乗り出していった。その成果は一九六〇年代には早くも表れた。北朝鮮のスポーツ国際大会のデビュー戦というべき、翌年に東京オリンピックを控えた一九六三年にインドネシアのジャカルタで開催された新興国のスポーツ大会、GANEF O (The Games of the New Emerging Forces) において、辛金丹が女子陸上短中距離三種目で優勝し、しかも当時の世界最高

記録をたたき出した。結局、東京オリンピックへの参加は開会式前日に取りやめたが、スポーツの国際舞台での北朝鮮の活躍は続いた。一九六六年にイングランドで開催されたサッカーワールドカップにおいて、北朝鮮はイタリアを破ってベスト8に進出した。オリンピックでの初の南北同時参加となった一九七二年のミュンヘンオリンピックでは、北朝鮮は射撃での初の金メダルを始め、銀メダル一個、銅メダル三個を獲得した。それに対して、韓国は柔道の銀メダル一個に終わった。

この「惨敗」を受けて、韓国も国家的なスポーツエリート養成を本格化させることになる。一九七三年に日本でもよく知られているメダル獲得者（オリンピック銅メダル以上、アジア大会金メダル）に対する兵役免除が始まった。さらに「四強制度」、すなわち全国大会で四位以上になれば、体育特技者として大学に進学できる制度も導入された。一九七五年には、国際大会の順位によって獲得されるポイントに応じて支給される年金制度もスタートした。このような「アメ」の効果もあってか、一九七六年のモントリオールオリン

ピックにおいて韓国はレスリングで初の金メダルを獲得することに成功した。

●打倒北朝鮮から「克日」へ

一九八〇年代に入り、経済力を反映してか国際スポーツの世界で韓国は北朝鮮に対して優位に立つようになる。すると韓国スポーツの「仮想敵国」は、北朝鮮から日本へと移ることになった。一九八〇年に実権を握った全斗煥政権は、自らのダーティなイメージ払拭のために、「体育立国」の名の下にスポーツ振興により積極的になった。まず、一九八六年のアジア大会と一九八八年のオリンピックの招致に成功した。

それまでアジアのスポーツ界の盟主は日本であったが、東京オリンピックのときのような勢いはみられなくなっていた。他方で、一九八二年にはいわゆる教科書問題が発生し、韓国では歴史認識問題を背景にした新しい反日の気運が生まれていた。そこでは単なる反日ではなく、日本に追いつき、追い越そうという意味で「克日」という新たな言葉が生まれたが、スポーツはまさに「克日」の象徴となったのである。一九七〇年代ま

でのスポーツエリート育成体制はそのままに、政府はさらに競技力向上のために財界の資金に目をつけ、財閥のオーナーに各競技団体の会長に就任することを求めたとされる。その努力が実を結び、金メダル数に限って言えば、一九八六年のアジア大会、一九八八年のオリンピックの両大会で韓国は日本を初めて上回った。アジア一位の座は中国に譲ることになったが、その後も韓国は夏季オリンピックで日本を上回る金メダルを獲得するようになって現在に至っている。他方で、北朝鮮との関係では、一九九一年に千葉で開催された世界卓球選手権での南北統一チーム、二〇〇〇年のシドニーオリンピックでの南北合同入場など、南北和解の象徴としてスポーツが用いられるようになっていく。

●硬質化する対日ナショナリズム、深まる日韓交流

スポーツにおける南北の融和ムードとは対照的に、日本戦で勝つことへのこだわりは相変わらずである。しかし、それはスポーツの現場、さらには政治にも負の影響をもたらしている。二〇一二年

カーの三位決定戦、日本との対決を前に、韓国の洪明甫監督は選手たちに対して、「死のうとすれば生きる、生きようとするれば死ぬ」といつて感情を表に出したという。これは豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に水軍を率いて日本と戦った英雄である李舜臣將軍が語った言葉である。その効果もあって(？)、韓国は日本に勝利して銅メダルを獲得する。しかし、その直後に起こってしまったのが、あの「独島プラカード」事件である。試合の前日にあった李明博大統領の竹島訪問による日韓関係の悪化に、この事件は拍車をかけてしまった。

しかし、日韓のスポーツをナショナリズムでのみ語ってしまうのも、あまりに一面的である。洪明甫に請われて韓国オリンピック代表でフィジカルコーチを務めていた池田誠剛によれば、試合直後の宿舎では、日韓の選手が互いの健闘を称えて大いに盛り上がりという場面もみられた。また、韓国ではプラカードを持った朴鍾佑を擁護する声が圧倒的だったが、朴鍾佑自身は、後日、わざわざ池田清剛を訪ねて謝罪したという。そもそも池田のように、多くのサッカー人が日韓の国境を越えて仕事

をすることが今や当たり前になっている。ヨーロッパで活躍している日本人選手のブログをみても、最も仲のよいチームメイトとして韓国人選手がしばしば登場する。日韓のスポーツをみる場合、こうした深まる人的交流を含めて多面的に捉える必要があるだろう。

本特集では、このような新興国・途上国とスポーツの関わりを、アジア経済研究所の各国担当、および各国スポーツに詳しい外部専門家が紹介している。各国の事情を反映して、とりあげるスポーツも、トピックも様々である。冒頭で述べたように、スポーツは何よりも娯楽である。本特集も気軽に楽しんでいただければ幸いである。

(あべ まこと／アジア経済研究所 新領域研究センター)

《参考文献》

①大島裕史『コリアンスポーツ「克日」戦争』新潮社、二〇〇八年。

②元川悦子『日本人初の韓国代表 フィジカルコーチ池田誠剛の生きざま——日本人として韓国代表で戦う理由』カンゼン、二〇一三年。